

研究ノート

平安時代における仮名表記の諸問題

—— 『土左日記』を資料として ——

石塚 秀雄

平安時代における仮名表記について、その実態を探るに当たり、『土左日記』（注①）をテキストとしたのには大きな理由がある。それは、『土左日記』の作者である紀貫之の自筆原本が、後述するように、現在ほぼ確実に再現できているからである。したがって、『土左日記』をテキストとしてその表記を考究すれば、平安時代初期（940年ごろ）の仮名の使われ方の特徴が明確に把握できるということになる。

実際にその表記に当たってみると、いくつかの問題点が浮かび上がってきた。特に目につくのは、仮名「ん」字の使用法である。ある場合は「も」を、またある場合は「む」を表していると思えない。一体、一つの仮名が二つの音声を表すことがあるのだろうか。また、撥音「ん」を表している可能性はないのか。

また、ヤ行の「え」である個所をハ行の「へ」で表記している例が四種類もある。これは単なる誤記なのであろうか。

この研究ノートでは、貫之自筆本再建の経緯と「ん」字の使用、ヤ行「え」に関する先行論文、関係論文の調査と要約をまとめてみた。また、これらの問題に関する筆者の仮説も一部記しておいたが、詳しくは次回の研究論文に譲りたい。

キーワード： 『土左日記』、仮名表記、仮名文字「ん」、ヤ行の「え」

一 紀貫之自筆本再建の経緯

『土左日記』はまことに幸運な書物である。『源氏物語』にしる『枕草子』にしる、日本の古典と称される作品は、手書きによる写本の形で伝えられてきたが、作者の書いた原本を何人もの人が書き写したものであるため、どうしても写し誤りや恣意的な加除訂正がなされがちである。従って、現存する写本は、原本成立から（何度も書き写され）かなりの時を経たものばかりである。『源氏物語』にしても信頼できる写本は、鎌倉時代初期を遡るものはない。

ところが、『土左日記』は、紀貫之自筆本が、執筆以後 550 年を過ぎた室町時代まで存在していたのである。しかも、この自筆本から直接書き写された四冊の写本のうち、二冊までが現存してい

るのである。また、失われた二冊の写本から、直接書き写された写本もそれぞれ一冊ずつ現存している。

これらの写本を材料に、紀貫之自筆本をほぼ完璧に再建したのが池田亀鑑博士である。昭和16年に刊行された氏の著書によってその再建の概様をつかんでおこう。

①『古典の批判的処置に関する研究』 池田亀鑑（昭16）

本書は第一部から第三部まで三巻にわたる大冊であるが、『土左日記』を直接の資料としているのは主に第一部と第三部である。

次に第一部の目次を簡潔に記しておこう。

- 第一章 原本とその伝来
- 第二章 原本再建のための資料
- 第三章 原本再建の可能とその方法
- 第四章 青谿書屋本の吟味と修正
- 第五章 貫之自筆本の形態とその性質
- 第六章 土左日記本文史の展開
- 第七章 定家自筆本とその系統
- 第八章 宗綱自筆本とその系統
- 第九章 実隆自筆本とその系統
- 第十章 実隆本末流諸本の系統学的処置
- 第十一章 為相本系統の本文の成立とその性質
- 第十二章 宇万伎本の本文の展開
- 第十三章 土左日記末流に於ける本文の混態

池田博士はまず第一章で、長寛元年（1163年）後白河院の御願によって造営された蓮華王院の宝蔵に収納されていた『土左日記』が、紀貫之自筆の原本であることを確定される。この自筆本は、室町時代まで確実に存在していたのである。

次に第二章で、現存しない紀貫之自筆本が、幸運にも四度に渡って別々に転写された経緯を述べる。すなわち、

- 1 藤原定家による転写 文暦2年（1235年）
- 2 藤原為家による転写 嘉禎2年（1236年）
- 3 松本宗綱による転写 延徳2年（1490年）
- 4 三條西実隆による転写 明応元年（1492年）

の四回である。

池田博士が本書を執筆した当時、この四冊のうち見ることができたのは、1の定家筆本だけであった。ところが、幸いなことに、2・3・4の各本から直接転写した写本が現存していた。すなわち

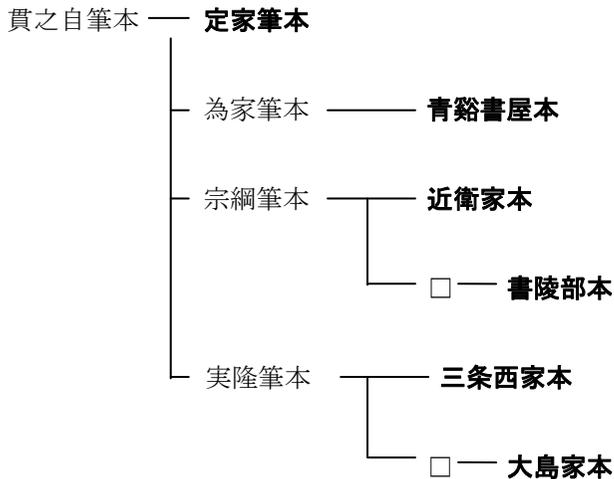
2の為家筆本を転写した青谿書屋本

3の宗綱筆本を転写した近衛家本

4の実隆筆本を転写した三条西家本

である。そして校勘を重ねた結果、青谿書屋本は、為家自筆本の忠実な模写であることをつきとめた上、宗綱本系の書陵部本と実隆本系の大島家本を併せて考究すれば、それぞれ2の為家筆本、3の宗綱筆本、4の実隆筆本の実態を把握することの高い可能性を見出したのである。

これらの諸本の系譜は次のようになる。(ゴチック体で示したものは、執筆当時存在が判明していたもの)



このうち最も原本に近いのが青谿書屋本であることを実証した博士は、この写本を中心にして他の三系統の諸本を校合し、原本再建の可能性とその方法とを探ったのである。

この時、最も役に立ったのは、定家筆本の巻末二葉の部分であった。そこは、定家が貫之自筆原本を形式も筆跡もそっくりそのまま模写した部分なのである。これらを活用し、為家自筆本から青谿書屋本に至る過程において生じたと思われる本文変化の総体を、他の諸本の有する異文との比較によって吟味し、その一つ一つを批判することによって貫之自筆本の本文をほぼ完全に近く再建したのである。その具体的姿は、第三部に見ることができるが後述にまかせておく。

②「青谿書屋本『土佐日記』の極めて少ない独自誤謬について」 萩谷 朴（昭63）

昭和16年、池田亀鑑博士が『古典の批判的處置に関する研究』を発表した頃、現存しないと思われていた藤原為家自筆本が、昭和59年（1984年）に発見された。

②はこれを調査した萩谷朴氏の論文（『中古文学』41）である。氏によれば、青谿書屋本独自の誤謬はわずかに四個所に過ぎず、為家自筆本の独自誤謬は十四個所にのぼるという。

池田博士が貫之自筆本再建に当たって、青谿書屋本を中心に据えた炯眼が立証されたことになる。

続いて『古典の批判的處置に関する研究』の第三部を見ておこう。目次は次の通りである。（番号は同書にはない。筆者の添付）

- 1 原本再建のための土佐日記諸本校異
- 2 土佐日記諸伝本異文統合表
- 3 古代平仮名字体一覧表
- 4 土佐日記諸本平仮名字体統計表
- 5 土佐日記本文研究年表

1は貫之自筆本を建設するために、重要な七種の写本の異同を分類、列挙したもの。底本には青谿書屋本を用い、一面ずつ写真版を掲げてある。それに定家自筆本、近衛家本、書陵部本、三条西家本、大島家本の六種の写本の異動を全て頭注の形で示したもの。『土佐日記』研究の全ての土台となる労作である。

2は、土佐日記諸伝本の系譜樹立及び原本再建を目的に、底本を青谿書屋本とし、実に八十種の諸本との異文を整理統合したものである。

八十種の写本とは、定家本系十五種、宗綱本系三種、実隆本系二十五種、とそれ以外の光広改竄系二種、末流諸本三十五種である。（注②）

この1・2の資料からは様々な成果と課題とが浮かび上がってくるが、ここではヤ行の「え」の表記について考えてみたい。

青谿書屋本十二月廿三日の記述に「みへさなる」という表現がある。これは「見へぎんなる」の記述と思われるが、言うまでもなく「見ゆ」はヤ行下二段の動詞であるから、この部分は当然「みえさなる」となるべきである。同種の問題は一月五日「たへす」（絶えず）、一月廿日「おもほへたれども」（思ほえたれども）、一月廿一日「きこへたる」（聞こえたる）にも見られる。即ち、「見ゆ」「絶ゆ」「思ほゆ」「聞こゆ」というヤ行下二段動詞の未然形または連用形において、「え」と表記されるべき部分が「へ」と書かれているのである。

池田博士は勿論このことに気づいており、同書では、「見」につづくもの、「思ほ」につづくもの、

「絶」につづくもの、「聞こ」につづくものを、各写本について調査し、その結果を次のようにまとめた。(第一部 158 ページ。ただし、博士の挙げた「すみのえ」は動詞ではないので、ここでは省く)

	青谿	定家	書陵	三条
江	2	0	0	0
へ	14	5	9	13
え	0	11	6	3
(他)	0	1	3	0

これを見ると定家筆本を除いて、圧倒的に「へ」への接続が多いことがわかる。ということは、これは単なる誤字ではなく、原本である貫之自筆本もまた、「見へ」「絶へ」「思ほへ」「聞こへ」と表記していたのであろうか。池田博士は、貫之自筆本が「へ」と誤記しやすい「え」を書いていたのだとしている(161 ページ)が、はたしてそうであろうか。貫之自身の誤写も視野に入れて考究してみたい。

博士は、第五章第三節に「原本の仮名」と題する項目を立てて「貫之自筆本に於ては、あ行の「え」とや行の「え」とは区別せられ、前者には「衣(の草書体)」、後者には「江(の草書体)」のみが専用せられている」と述べている。(205 ページ。なお、「の草書体」は筆者が補った。)

二 池田博士説に関連する諸論文

③『国語音韻の研究』 橋本進吉 (昭 25)

ここに収録されている論文「国語音韻の変遷」は、昭和 13 年に発表されたものであるが、その中で橋本博士は「ア行のエとヤ行のエの区別は、平安時代に入ってからもしじめの数十年はなお保たれて仮名でも書き分けられていたが、村上天皇の頃になると全く失われたようである」(80 ページ)と述べている。紀貫之が『土左日記』を書いた頃、丁度その頃がア行とヤ行のエが同音になった頃なのである。表記にも混乱が生じ初めたかもしれない。また、博士はこのようにも述べる。「ア行の e とヤ行の ye とがすべての場合に同音に帰したとすれば、e よりむしろ ye になったとする方が自然である。e になったとすれば、語頭以外の e はその前の音の終の子音と直接に結合して、古代国語の発音上の習慣に合わないからである。しかし、またもとの e と ye との区別が失われて、新たに語頭には e を用い、語頭以外には ye を用いるという決まりができたかもしれない。」と。

この後半の指摘には、馬淵和夫氏が後年、同種の指摘を行っている。

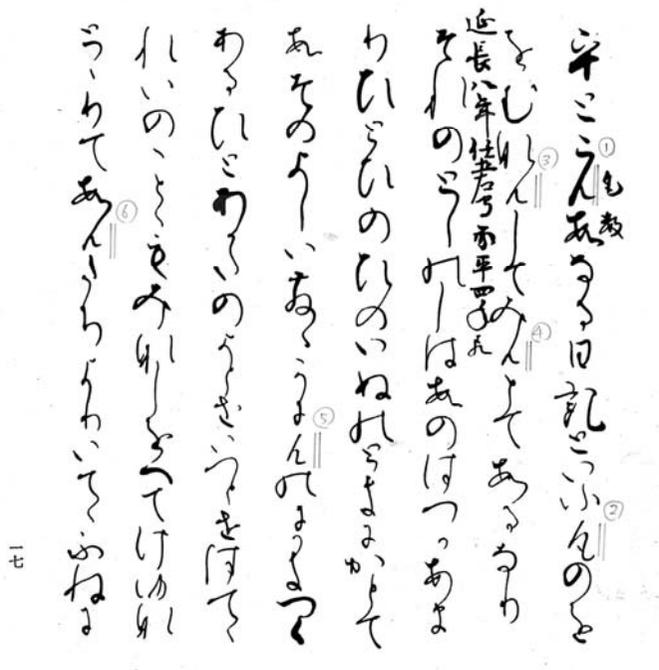
④『国語音韻論』 馬淵和夫（昭46）

馬淵氏は本書の中で、『土左日記』とほぼ同じ頃成立した『和名類聚抄』（934年頃成立）には「語頭には「衣」を用い、語中には「江」を用いるという傾向が歴然としておる」という。（52ページ）
これらの説を踏まえた上で、前述の『土左日記』に見られるヤ行のエの表記を考えてみたい。

ところで、この青谿書屋本『土左日記』の仮名表記には、もう一点気になるものがある。仮名「ん」の表わす音声である。既に池田博士は、前述の「第三節 原本の仮名」の中でこの点にもふれ、「ん」は、む・う・も・んに共通して用いられている、としている（205ページ）が、はたしてこのようなことが可能なのであろうか。同一の仮名文字が同時に二音以上の音声を表現することは、仮名の遣い方の原則にはずれているのではないか。

ちなみに青谿書屋本『土左日記』影印本（萩谷朴編 昭43 新典社）の第一ページ目を示してみる。もうここに既に「ん」は六箇所に表示われ（二重傍線部）ている。このうち②はやや字体を異にするように見えるので、これを除いてみても、残りの五箇所はいずれも明確な「ん」字である。そして、その表す音声調べてみると、意味の上から、それぞれ①は「も」、③は「も」、④は「む」（新岩波古典大系本）「ん」（旧岩波古典大系本）⑤は「も」、⑥は「む」を表していることになろう。確かに「ん」字は「も」または「む」音を表しているのである。

これについても、既に先人の優れた論考がある。



⑤ 「ム・モの表記に用みられたといはれる仮名「ん」の考察」鶴久（昭41）

これは『香椎湯』十二に発表された鶴久氏の論文である。この中で氏は、一般に言われているような「ム」に相当する「ん」は「无」からきたもの、「モ」に相当する「ん」は「毛」からきたものとする説は元永本古今集巻二十における「无」の使用例から見て当を得ないものとした上で、奈良時代から平安時代の数多くの資料を点検した上で、「无」やこれに由来した仮名「ん」で表記された語は、たとえ従来「モ」と見なされていた語でも、「ム」と読むべきではないかと結論づけている。

⑥ 「「む」「も」を表わすといわれる仮名「ん」字小考」中川美和（平7）

これは『日本語研究』15に発表された中川美和氏の論考である。氏は資料を青谿書屋本土左日記と定家筆本土左日記の表記に求め、両者を比較、検討する中から定家が青谿書屋本では「ん」と表記しているものを「む」「も」「ん」と書きわけていることを確認した。中でも、語頭、語中の「も」に置きかえられる「ん」字が他語との紛れをおそれか漢字表記されているという特色をつかんだ。その上で定家が書き分けた背景には、「ん」字がム・モ両音を表すものではなくなっていたという背景を想定している。

三 今後の研究の展望

『土左日記』に見る仮名表記の問題点を、ヤ行「え」であるべき仮名がハ行「へ」で表記されていること、仮名文字「ん」が音声「む」「も」を同時に表しているらしいことの二点に絞り、先行研究の到達点を眺めてきた。これらの問題にどう取り組み、どのような展望を抱いているのか、次に記しておきたい。

(1) ヤ行「え」がハ行「へ」と記されている問題

既述のように青谿書屋本においては、「見ゆ」「絶ゆ」「思ほゆ」「聞こゆ」の未然・連用形が、本来「見え」「絶え」「思ほえ」「聞こえ」であるべきなのに、それぞれ「見へ」「絶へ」「思ほへ」「聞こへ」と表記されている例が合計十四例もある。池田博士はこれを青谿書屋本の（ひいては為家本の）、「誤写」とし、その理由を貫之自筆本が「へ」と誤認しやすい「え」を用いたためとされているが、ではその誤認しやすい「え」とは如何なる文字なのか、誤記されていない部分とあわせてこの四語の表記を全て点検する必要があるだろう。

この時、注目すべきは、同じ貫之自筆本を書写した定家本の存在である。定家は為家が「誤写」した十四例のうち、同様に「誤写」した部分は五例しかない。これについてもその実態を確認した上で、為家本との対比が必要となろう。

これらの考究の結果導き出される可能性のひとつとして、貫之自筆本の「誤記」を挙げることは決して不自然ではないと思われる。当時定着していたと思われるハ行転呼の現象も、これらの「誤

記」を助長する役目を果たしたのではないだろうか。

(2) 文字「ん」が音声「む・も・ん」を表すという問題

一つの仮名文字が二つ以上の音声を表すことがあるのだろうか。これが疑問の出発点であった。既に『土左日記』冒頭部分の説明で記したように、どう見ても仮名文字「ん」は、音声「む」「も」を表記しているとしか見えない。

では、仮名文字「ん」は、この文字の出来はじめから二つの音声を表現していたのであろうか。そうではあるまい。当初はそれぞれ別の文字であったのではないか。

すなわち「も」を表す文字「毛」と「む」を表す文字「无」の草書体が、いつか「ん」に一体化していったのではないか、という説を改めて取り上げ、検討する必要を感じている。

現在、ひとつだけ明確になっていることがある。それは『土左日記』には、撥音「ん」の表記はないだろうということである。中田祝夫博士の説くところ（『土佐日記中の撥音の二種』『新註国文叢書 土佐日記』1951 講談社刊）によれば、「（『土佐日記』中には、撥音に二種類あり）唇音的な撥音は「む」で書かれ、唇音の伴はないものは無表記のままなのではないか」というのである。そしてその例として

(A) よびにふみもてきたなり（12月25日）

なくひにぞあなる（1月29日）

(B) そもそもいかよむだる（1月7日）

すすきにてきるきるつむだる（1月9日）

等を挙げた上で「土佐日記にも撥音の仮名はあるが、それは「M」撥音であって「N」撥音は表記すべき仮名がなかったようである」とし、「土佐日記にンを書いてない理由はここにある。この日記では仮名のんはむの仮名なのである。」と明記されている。

これらを踏まえた上で『土左日記』の仮名文字「ん」の表す音声を確定していきたい。

注

(注1) 『土左日記』の「土左」の表記に関しては、貫之自筆本から直接書写した定家本・為家本の表記に従った。

(注2) 「光広改竄本」系以下の諸本は、貫之自筆本より何度か書写を繰り返した後の末流本であり、為相本・無窮会蔵本・桃園文庫本等がこれに含まれる。

(‘08.10.27)

Research Note

A Few Issues on *Kana* Expressions in the Heian Era:
Using *Tosa Nikki* as Research Material

Ishizuka, Hideo

Tosa Nikki, or *Tosa Diary*, is an unusual Japanese classic, whose original text, hand-written by its author, Kino Tsurayuki, can be reconstructed. By studying the *kana* expressions used in this book, the actual discourse of the Japanese language used during the Heian Era (around 940 A.D.) can be examined and clarified. In fact, a few issues were identified by closely examining the uses of the *kana* letter “n” and verb conjugations of “ya-gyo.”

This research note first reviews and summarizes the existing literature on the issues. It is followed by the presentation of hypotheses in the context of a future direction of the author’s research.

Key words: *Tosa Nikki*, *kana* expressions, *kana* letter “n”, “e” in “ya-gyo”
